

レポート:ロジスティック回帰のプログラムソースを開発せよ。(C,C++,JAVAなど) (締切6月24日)

- $y_i = \frac{1}{1+\exp(-ax_i-b)} + \epsilon, \epsilon \sim N(0, \sigma^2)$
- $\epsilon \sim N(0, \sigma^2)$
- 入力 (x,y)データファイル の読み込み
- パラメータa,bの推定値
- ニュートン ラフソン法と最急降下法のプログラムをひとつづつ作成せよ。
- 提出物
- プログラムの ソース
- 次のページのレポート

乱数データ発生プログラムと解析結果

- $x_i \sim N(0, 1^2)$
- データ数 20, 50, 100個 それぞれ発生する。
- それぞれのデータ x_i について $a = 0.8, b = -0.3$ と設定する。
- $y_i = \frac{1}{1+\exp(-ax_i-b)} + \epsilon,$
- $\epsilon \sim N(0, 0.1^2)$
- により、データ数 20, 50, 100個 それぞれ発生する。
- 結果、(x, y)の組み合わせが20個、50個、100個の3種類のデータがそう。
- 20個、50個、100個の3種類のデータに対して
- ニュートンラフソン法のプログラム、最急降下法のプログラムで (a, b)の推定値と真値の誤差、フィッシャー情報量を用いた漸近誤差、推定平均時間、を求め、 レポートで解析せよ。

次のロジスティック回帰の尤度方程式を求めよ。

- $y_i = \frac{1}{1+\exp(-ax_i-b)} + \epsilon, \epsilon \sim N(0, \sigma^2)$
 - 尤度関数Lは, $L(a, b, \sigma^2 | D) = \prod_{i=1}^n f(y_i | a, b, \sigma^2)$
 - 対数尤度llは, $l(a, b, \sigma^2 | D) = \ln(L(a, b, \sigma^2 | D))$
- $$L(a, b, \sigma^2 | D) = \prod_{i=1}^n \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} \exp \left[-\frac{\left(y_i - \frac{1}{1+\exp(-ax_i-b)} \right)^2}{2\sigma^2} \right]$$
- $$l(a, b, \sigma^2 | D) = -\frac{n}{2} \ln(2\pi) - \frac{n}{2} \ln(\sigma^2) - \frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n \left(y_i - \frac{1}{1+\exp(-ax_i-b)} \right)^2$$

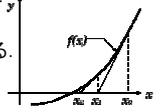
- $l(a, b, \sigma^2 | D)$ をa,bそれぞれについて偏微分すると,
- $\frac{\partial l}{\partial a} = \frac{\partial}{\partial a} \left[\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n \left(y_i - \frac{1}{1+\exp(-ax_i-b)} \right)^2 \right]$
- $\frac{\partial l}{\partial b} = \frac{\partial}{\partial b} \left[\frac{1}{2\sigma^2} \sum_{i=1}^n \left(y_i - \frac{1}{1+\exp(-ax_i-b)} \right)^2 \right]$
- a,bの最尤推定値を求めるために、ニュートン法を用いる。

ニュートン法(多次元)

- $x = [x_1, x_2, \dots, x_n]^T$ のとき、ヘッセ行列Hを用いて、以下のように表せる。
- $$x_{n+1} = x_n - H^{-1} \nabla f(x_n)$$
- ここで, $H = \begin{pmatrix} \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_1} & \dots & \frac{\partial^2 f}{\partial x_1 \partial x_n} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \frac{\partial^2 f}{\partial x_n \partial x_1} & \dots & \frac{\partial^2 f}{\partial x_n \partial x_n} \end{pmatrix}, \nabla f(x) = \begin{pmatrix} \frac{\partial f}{\partial x_1} \\ \vdots \\ \frac{\partial f}{\partial x_n} \end{pmatrix}$
- 2変数の時は以下のように表せる。
- $$H^{-1} = \frac{1}{H_{11}H_{22} - H_{12}H_{21}} \begin{pmatrix} H_{22} & -H_{12} \\ -H_{21} & H_{11} \end{pmatrix}$$
- $$H_{11} = \frac{\partial^2 f(x_1, x_2)}{\partial x_1 \partial x_1}, H_{12} = \frac{\partial^2 f(x_1, x_2)}{\partial x_1 \partial x_2}, H_{21} = \frac{\partial^2 f(x_1, x_2)}{\partial x_2 \partial x_1}, H_{22} = \frac{\partial^2 f(x_1, x_2)}{\partial x_2 \partial x_2}$$

ニュートン法(1次元)

- 関数f(x) がf'(x) = 0となるxを近似的に求める方法である。
 - 例として、図のような関数f(x)を考え、f(x) = 0となるxを求める。点 x=aの周りでテーラー展開すると,
 - 1次の項までを用いて、f(x)は以下のように近似できる。
 - f(x) = 0とすると、以下のようにxを求めることが出来る。
- $$f(x) = f(x_0) + f'(x_0)(x-x_0) + \frac{f''(x_0)}{2!}(x-x_0)^2 + \dots + \frac{f^{(n)}(x_0)}{n!}(x-x_0)^n$$
- $$f(x) = f(x_0) + f'(x_0)(x-x_0)$$
- $$x_{n+1} \approx x_n - \frac{f(x_n)}{f'(x_n)}$$



最急降下法

- ニュートン法の特解として最急降下法があり下記のように表せる。

$$x_{n+1} = x_n - \alpha^{-1} \nabla f(x_n) \quad (\alpha > 0)$$

- (注)ニュートン法はヘッセ行列をHとして以下のように表せた。

$$x_{n+1} = x_n - H^{-1} \nabla f(x_n)$$

- α と初期値を設定し、繰り返し計算することにより極小値を求める。

最急降下法を用いたロジスティック回帰の最尤推定

- 今回の問題では、以下のように表せる。

$$\begin{pmatrix} a_{i+1} \\ b_{i+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a_i \\ b_i \end{pmatrix} - \alpha \begin{pmatrix} \frac{\partial l}{\partial a_i} \\ \frac{\partial l}{\partial b_i} \end{pmatrix} \quad \begin{aligned} \frac{\partial l}{\partial a} &= \sum_{i=1}^n \left(y_i - \frac{1}{1 + \exp(-ax_i - b)} \right) \left(\frac{x_i \exp(-ax_i - b)}{(1 + \exp(-ax_i - b))^2} \right) \\ \frac{\partial l}{\partial b} &= \sum_{i=1}^n \left(y_i - \frac{1}{1 + \exp(-ax_i - b)} \right) \left(\frac{\exp(-ax_i - b)}{(1 + \exp(-ax_i - b))^2} \right) \end{aligned}$$

- α を任意に設定し、a,bの更新値を交互に上の式にいれて、それらの値が収束するまで繰り返し計算する。
- 収束条件は、 $|a_{i+1} - a_i| \leq \epsilon_1, |b_{i+1} - b_i| \leq \epsilon_2$ などが使われる。 10^{-3} や 10^{-5} が多いが、収束しない場合は条件を緩くする。
- a,bの初期値は、ロジスティック回帰などの凸関数の場合、(a,b)=(0,0)とすることが多い(精度への影響はない)。